

研究資料

ダンス指導の現状と問題点に関する報告

～大阪市立中学校教員を対象として～

Current situations and matters in improvement on dance in junior high PE
class in Osaka city

北島 奈津¹⁾ 白井 麻子¹⁾ 伊藤 美智子¹⁾
Natsu Kitajima¹⁾ Asako Shirai¹⁾ Michiko Ito¹⁾

Abstract

In order to create research data for facilitating the smooth implementation of dance classes as a compulsory subject, this study tries to obtain an accurate assessment of the current state of dance classes and identify the problems that they face. We used a questionnaire survey of 108 teachers at junior high schools in Osaka City.

The results, and our conclusion, are as follows:

- 1) The dance classes are conducted by only a certain number of female teachers.
- 2) In many cases, the dance curriculum consists of "mass games". The study requirements specified in the national curriculum are not implemented, and it is feared that this may lead to a decrease in quality. Furthermore, the number of boys enrolling for dance classes tends to be low. This is expected to be a major problem as the new guideline mandates coeducational dance classes.
- 3) The teachers requested that practical dance teaching skills be incorporated in the teacher training program as they experienced difficulties and anxiety when conducting dance classes.

Thus, it is necessary to enhance the teacher training program for dance teachers to improve their understanding of the national curriculum standers and their teaching skills.

キーワード 授業の実施状況 求める研修内容 教諭の意識 男女必修化

1. 緒言

平成21年に告示された中学校学習指導要領改訂に伴い、中学校1・2年生での武道とダンスを含む全領域の必修化が示された（文部科学省,2009）。そこには、新教育基本法の教育目標

である「伝統と文化の尊重」の実現を目指して、武道の必修化と共に「集団活動や身体表現などを通じてコミュニケーション能力を育成する」ことを重んじる基本方針において、ダンスが必修化された背景がある（文部科学省,2010）。ま

¹⁾ 大阪体育大学

Osaka University of Health and Sport Sciences

た、生涯スポーツの観点から豊かなスポーツライフの実現に向け、様々な領域の学習を十分に体験させた上で、それらをもとに自らがさらに探求したい運動を選択できるようにするという大きな方針がある。

ダンスに関しては、これまで平成元年の改訂で男女必修となり、平成10年の改訂では、従来から実施されていた「創作ダンス」「フォークダンス」に加えて「現代的なリズムのダンス」が新たに導入された。学習指導要領改訂の度に大きな変化を遂げてきたが、今回の改訂はこれまでの方向を変換するというより、これまでの方法論上の不足を補い、より確かなものにしていくとするものである(片岡,村田2009)。今回の学習指導要領の改訂をうけて、村田(2008)は「他の運動領域とは異なった学びのスタイルをみんなのものにしていくチャンス」であると述べている。一方、ダンス授業の量的拡大に伴う、教育現場の対応については様々な問題が予想される。中村(2009)は、ダンスの授業についての実態調査および意識調査を実施した研究を行い、ダンス必修化による授業数増加とそれによる男性教諭のダンス授業担当に係る問題点を指摘している。また寺山ら(2009)は、ダンス講習会に参加した38都道府県73名の教員を対象に、ダンス必修化に向けた意識調査や授業の実施状況を調査し、教師のダンスに関する専門的知識や理解を高めることが必要であると報告している。加えて、ダンス必修化によって「生徒によい影響をもたらし、教師に負担をしいる」と多くの教員が考えていることも報告している。全国的な調査であるが、地域による意識の違いがあるか。また、今後教師はどのような専門的知識を研修で身につけたいと考えているのかについては、明らかになっていない。

そこで本研究は、大阪市の中学校におけるダンス授業の現状と、学習指導要領が目指す指導目的の達成状況を把握する。また、今後の課題を明らかにすることによって、必修化されたダンス授業が円滑に実施されることを目指した研究資料を作成することを目的としている。

2. 研究方法

2.1 調査対象

調査対象は、大阪市中学校教育研究会に参加した大阪市立中学校教諭108名(男性54名・女性54名)である(表1)。本調査対象者は、大阪市の130中学校(分室1)教諭の約30%(2010年度現在)にあたる(男性は、男性全体の23%、女性は、女性全体の32%)。

実施日は2009年10月で、アンケート用紙を参加者全員に配布して、その場で回答してもらい、回答終了後に回収した。有効回答数は、108(100%)である。

2.2 調査内容

アンケート調査内容は、属性(性別・年齢・教師歴)、ダンス指導経験の有無と授業実施内容、ダンスに対するイメージ、ダンス研修会に対する要望、ダンス必修化へ向けての問題点などについて、プリコード選択法と自由回答法を用いて回答を得た。

2.3 分析方法

プリコード選択法を用いた質問項目については、その項目を集計し、算出した。自由回答法を用いた質問項目については、内容が類似した回答を1つのカテゴリーにまとめ、各カテゴリーをコーディングして集計し、定量化した。

3. 結果

3.1 属性について

調査対象は男女同数であるが、大阪市の体育教員全体の割合からすれば、男性が少ない。教職歴は、2年以上～30年以上と幅広い教職歴をもっている。最も多いのが、2年以上6年未満であり(n=37, 34%)、若手教員が中心であった。

3.2 ダンス指導の有無について

1) ダンス指導歴

ダンスの指導歴については、「ある」(n=55, 51%)、「ない」(n=53, 49%)であった。その内訳は、指導経験のある者では、男性15名(28%)、女性40名(74%)であった。一方、指導経験のない者では、男性39名(72%)、女性14名(26%)であった。この結果から7割以上の男性教員に指導経験がない事が明らかになっ

た。

男性の指導歴経験者を年齢別にみると、50歳代で割合が高く（50歳代の63%）、20歳代が最も低かった（20歳代の17%）（図1）。一方、女性の指導経験者では、40歳代・50歳代は全員が、30歳代ではほぼ全員が（30歳代の94%）経験者であった。一方で20歳代では、経験者は約半数の者（20歳代の52%）であることがわかった。この結果から男女共に20歳代が最もダンスの指導経験が少ないということがわかった。

指導経験のない理由については、指導する機会や必要がなかったことが大きな理由（n=51，70%）であった。

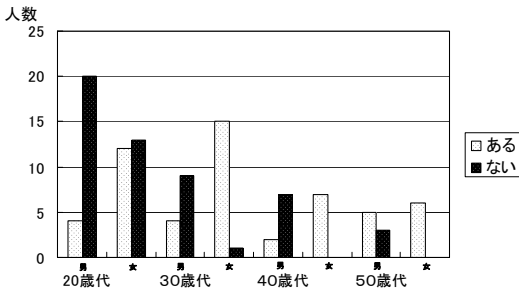


図1. ダンス指導経験 (n=108)

2) 指導未経験者の意識について

指導未経験者に対し、「これまでダンスの授業をしようと思いましたか」という質問項目に対して、自由記述で回答を求めた。その結果、25名の回答を得た（表1）。その内容としては、指導の意志がある者（n=12）と、そうでない者（n=13）の2つに大別された。指導の意志がある者は、指導したいと思っても実際には指導していない者が比較的多く、その理由として教師本人の苦手意識によるものや生徒の学習状況を勘案したという記述が多い事がわかった。

3.3 ダンス授業の実施状況及び実施内容

ダンス指導歴のある者（n=55）に対して、その経験授業形態を調べた結果、体育科単元ダンスが最も多かった（n=46,74%）。その授業内容は、「体育大会の演技としてのダンス」が最も多く（n=30,55%）、文化祭の舞台・宿泊行事等の演出が同じ数であった（n=10,18%）。この結果から単元のダンスが「体育大会の演技としてのダンス」になっていることが示唆された。また、その対象は「担当学年全員」が最も多く（n=36,52%）、次いで「複数学年生徒」（n=14,21%）、「一部の

表1. これまでダンスの指導をしようと思ったか(n=25)

指導の意志	実践	指導しようと思っているし、実践している
	指導の意志あり	実践なし
n=12	不明	学生の頃、ダンス研究会に参加して自分もダンスの授業がしたいと思った 楽しいので指導しようと思う 指導しようと思っているが、生徒の状況により取り組めない時期もあるのを残念に思っている
指導の意志なし		指導しようと思ったことはない（3名） 指導しようとして考えなかった 指導しようと思わなかった（4名） 機会もないし、必要もなかったので、指導しようと思わなかった 基本的なダンスのイメージが楽しくない、恥ずかしい感じがする 指導しようと思ったことはない 苦手なので指導しようとは思わなかった だらけてしまったり、自由な時間が作られてしまうので、ダンス指導は今のところは考えていない
n=13		

生徒」(n=12,18%)、「全校生徒」(n=6,9%) という結果であった。

加えて、男女別にみた結果は「女子のみ」(n=39,64%) が最も多く、次いで「男女混合」(n=20,30%) となり、「男子のみ」(n=2,3%) は非常に少ないことがわかった。これらの結果から、男女別にみたダンスの授業形態は、「女子のみ」が全体の64%と、依然として女子のみの授業形態が多いことがわかった。

指導しているダンスの内容選択については、「創作ダンス」(n=30,36%) が最も多く、「現代的なリズムのダンス」(n=28,34%)、「フォークダンス・日本の民謡」(n=24,29%)、「その他(エアロビックダンス)」(n=1,1%) であった(図2)。以上の結果から、学習指導要領に明記されている「創作ダンス」、「現代的なリズムのダンス」、「フォークダンス」の3つの主内容がほぼ均一に実施されていることがわかった。

以上の結果をまとめてみると、「体育大会としてのダンス」を「女子を対象として」、「創作ダンス」もしくは「現代的なリズムのダンス」、「フォークダンス」を主な内容として指導している実態が推察された。

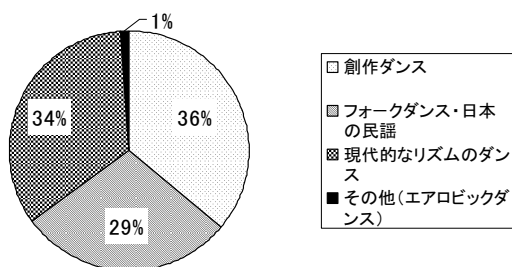


図2. ダンスの種類 (n=55)

3.4 ダンスに対するイメージについて

本研究の調査対象者全員にダンスに対して持っているイメージについて、プリコード選択法による回答を求めた(複数回答可)。その結果、「楽しい」(n=72,29%) が最も多く、「仲間とコミュニケーションできる」(n=49,20%)、「自己

表現ができる」(n=30,12%)、「ストレス発散できる」(n=22,9%)、「かっこいい」(n=21,9%)、「シェイプアップできる」(n=18,7%) など、肯定的な回答が多かった。一方、「難しい」(n=30,12%)、「運動量が少ない」(n=2,1%)、「その他(恥ずかしい・リズム感が取れない・達成感)」(n=2,1%) という否定的な回答もあった(図3)。以上のことから、ダンスに対するイメージは、概ね肯定的なイメージであるが、ダンスは「難しい」というイメージを持っている者も多くいることがわかった。

3.5 研修が必要と感じている内容について

1) 研修内容について

本調査対象者に対して、今後研修が必要だと感じているダンスの内容について回答を求めた(複数回答可)。その結果、「現代的なリズムのダンスの実技研修」(n=54,17%) が最も多く、続いて「創作ダンスの実技研修」(n=46,14%)、「ダンスの導入について」(n=39,12%)、「男女共修のためのダンス」(n=27,9%)、「フォークダンスの実技研修」(n=21,7%)、「創作ダンスの理論・講義」(n=20,7%)、「現代的なリズムのダンスの理論・研修」(n=20,7%)、「ダンスフレーズのつくりかた」(n=20,7%)、「リズムダンスから創作ダンスに展開指導法」(n=20,7%)、「男子のためのダンス」(n=19,6%)、「作品づくり」(n=15,5%)、「フォークダンスの理論・研修」(n=6,2%) という結果であった(図4)。

2) ダンスの必修化実現に向けた問題点について

本研究の調査対象者全員に対して、ダンスの必修化実現に向けた問題点について自由記述による回答を求めた(表2)。その結果29名の回答が得られ、教師の専門的な知識、指導能力に関する記述(n=15)や生徒の実態(n=6)などに関するものが比較的多いことがわかった。

以上のことから、教諭自身がダンスの専門的な知識や師範技能・指導法に不安感や課題を持っている者が多く、実践的な指導法に関する研修の実施を望んでいることが示唆された。

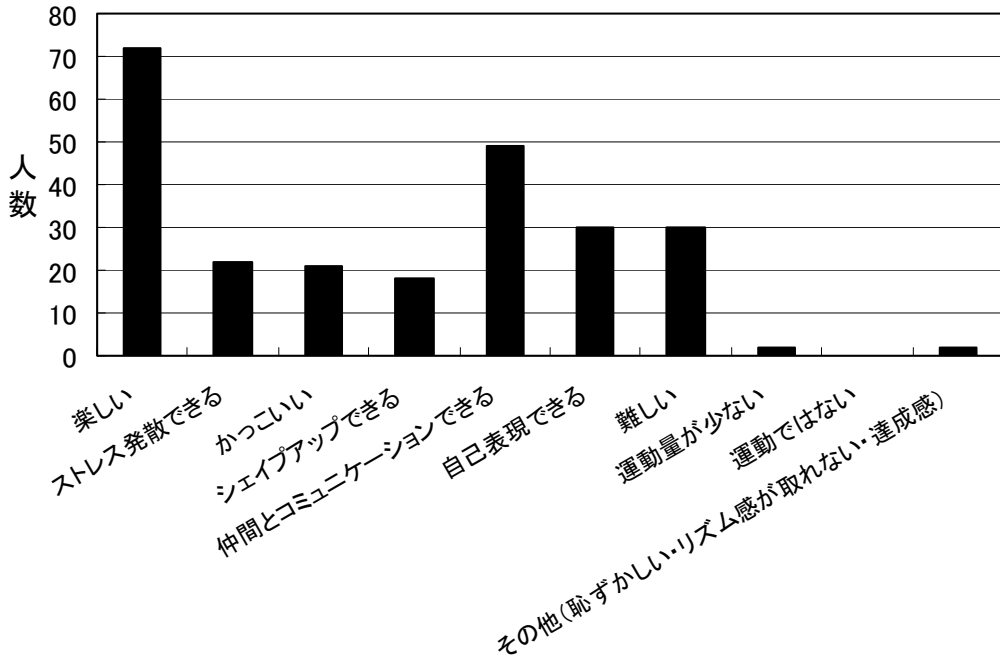


図3. ダンスに対するイメージ (n=108)

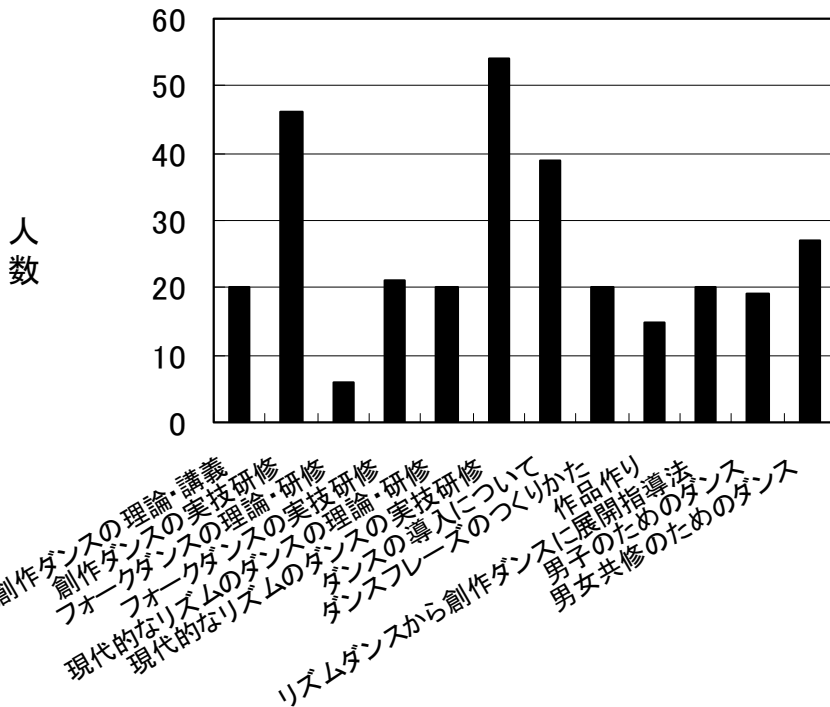


図4. 研修会の希望内容 (n=108)

表 2. ダンス必修化にむけた問題点 (n=29)

<p>専門知識・指導能力</p> <p>n=15</p>	<p>ダンスを練習する機会があればよいと思う</p> <p>教師の指導力向上が問題だと思う</p> <p>指導の方法、ポイントがわからないので、指導案や指導計画の案を知りたい</p> <p>指導が難しい</p> <p>どのように評価したらよいかわからない</p> <p>自分が創作できるものが少ない</p> <p>ダンスのセミナー、講座などが受講できる場所を探している</p> <p>指導方法が少ない</p> <p>自分の能力、知識不足</p> <p>実際にダンスの授業を受けた経験がないと難しい。わからないことを教えるのは不安</p> <p>指導者がダンス経験をして、自信をもつことが必要だ</p> <p>導入をどのようにすればよいか</p> <p>経験不足、知識不足</p> <p>自己の研究不足</p> <p>実力不足（専門的知識、技能不足）</p>
<p>生徒の実態</p> <p>n=6</p>	<p>ダンスに対してのマイナスイメージ（恥ずかしい、難しいなど）を持っている子に対しての指導法</p> <p>ダンスと聞いて生徒達が前向きに積極的に取り組む姿勢になかなか見えない</p> <p>恥ずかしがってやらない子が多い気がする</p> <p>学校状態（生徒）により、ダンス指導の実施が難しい時があった</p> <p>男子が意欲的に取り組めるようなダンス授業とは何かかわからない</p> <p>荒れた学校の場合、導入を工夫する必要がある</p>
<p>その他</p> <p>n=8</p>	<p>必修にする必要があるのかわからない</p> <p>ダンスを実践する人の不足</p> <p>全ての体育教師が指導できるわけではない（特に格技系、ラグビー系の教師）</p> <p>ダンスは特別なものだと思われがちであり、ダンスに対する恥ずかしさは教師側の問題として存在する</p> <p>学校の音響設備がお粗末すぎる</p> <p>研修の時間がとれない</p> <p>教材（ビデオ）が多くあることが望ましい</p> <p>小学校では表現ダンスが取り込まれているので、必修化は中学校1年生から段階的に取り組めばよいと思う</p>

4. 考察

4.1 指導経験について

男女同数の調査対象者の内、女性の74%に指導経験があるのに対して、男性ではわずか28%であった。さらに、20歳代を除く女性教諭の90%以上がダンス指導を経験しており、これまで女性教諭がダンス指導の主たる担い手であることが示唆された。しかし、20歳代の女性教諭の半数がダンス指導を経験していない実態があることから、ダンス指導を担当する女性教諭がある程度固定化している傾向にあることが推察される。さらに、20歳代男性教諭の83%で指導経験がないことがわかり、その指導経験がない

主たる理由は「指導する機会がなかった」という自由記述による回答が最も多かったことから、これまでダンス指導は、限られた教諭が行ってきたことが推察された。

4.2 ダンス授業の内容について

本研究の結果からダンス単元は、「体育大会としてのダンス」を「女子を対象として」、「創作ダンス」もしくは「現代的なリズムのダンス」、「フォークダンス」を主な内容として指導している実態が示唆された。この結果から見出された授業の実態としては、「マスケーム」としてのダンスが行われており、学習指導要領に示されている学習目標および内容にある「感じを込

めて踊ったりみんなで踊ったりする楽しさや喜びを味わい、イメージをとらえた表現」(文部科学省,2009)ができるような授業内容が実現できていないのではないかと推察される。さらに、新学習指導要領では、学習過程として習得・活用・探究の考え方を組み込んだ授業展開が求められており、それに十分応えられる内容の展開が行われていない可能性が高いと考えられる。

加えて、男子生徒がダンスの授業を受けることが少ない傾向にあり、男女必修化に向けて大きな課題になることが予想される。本研究の結果から推察すると、ダンスの男女必修化に向けて、男子生徒がダンスに取り組み易い様々な工夫が必要である。例えば、抵抗感がなく指導できる教材の工夫や環境づくりなどが重要となると考えられる。

中村(2009)は、ダンスの男女必修化に対する教師の否定的評価として、「指導できる教員が少ない、指導力不足」、「男子の指導は難しい、不安である」、「思春期なので自己表現は難しい」など、教師側の指導に対する苦手意識や不安感が教材開発や指導法以前の問題としてであると報告している。中村の報告と本研究の結果から考察すると、教師が積極的にダンス指導に臨めるような研修会の充実が求められる。

4.3 ダンスに対するイメージと求める研修内容について

ダンスのイメージについては、全体として肯定的なイメージをもっていることが示唆された。一方、「難しい」(12%)というイメージもあり、ダンスの必要性や魅力は認識しているものの、指導が苦手であると感じているといえる。この結果は、ダンスの楽しさや魅力・特性・教育的効果については理解しているものの、どのように指導したらその楽しさを学ばせることができるのかわからないと感じているものと考えられる。

ダンスの研修会で希望する内容としては、「現代的なリズムのダンスの実技研修」、「創作ダンスの実技研修」が最も多いことがわかった。全国の教員を対象とした松本ら(1994)の研究においても、今後身につけたい履修内容として、

「助言内容」、「実技能力を高める」という内容が多く挙がっていることが報告されており、特にダンス授業における指導助言や教員の実技師範能力の向上が重要であると考えられる。加えて、「現代的なリズムのダンス」については、平成10年の指導要領改訂と共に導入されたものであり、十分な指導法の提供が行われていないと考えられる。そのために、生徒に既成の振付を教えて、そのままのダンスを発表するだけの単元になってしまう危うさもあり、多くの教諭にとって実技研修を必要性としている要因になっているのではないかと考えられる。

また、ダンスの必修化実現に向けた問題点に関する自由記述において、専門的知識や師範技能不足と共に、評価の問題が挙げられた。ダンスは、他の単元とは異なった特性をもち、非常に評価が難しいとされている。今後の研究課題として、ループリックの作成など、個人の能力にふさわしい学習評価の作成も急務であると考えられる。

5. 結論

本研究の結果、大阪市の中学校におけるダンス授業の現状と課題は次のように整理され、今後取り組むべき内容について具体的な指針を得た。

1) ダンス指導に関しては、女性教諭が中心に指導をしており、7割以上の男性教諭にダンスの指導経験がない。また、女性教諭でも20代の女性教諭をみると指導経験の有無が二分することや、指導経験がない主たる理由が「指導する機会がなかった」としていることから、ダンス指導は限られた教諭が行っている傾向がある。

2) ダンスの授業内容に関しては、「体育大会としてのダンス」を「女子を対象として」、「創作ダンス」もしくは「現代的なリズムのダンス」、「フォークダンス」を主な内容として指導している。したがって、「マスゲーム」としてのダンスが単元内容の全体を占め、学習指導要領に示されている学習内容の実施や目標の達成が実現できていない可能性が高く、授業内容の質の低下に結びつくことが懸念される。また、男子

生徒が授業を受けることが少ない傾向にあり、今後男女必修化に向けて大きな課題となることが予想される。

3) ダンスの研修会で望まれる内容は、主に実践的な実技研修である。その背景には、教諭のダンスの特性や教育的効果への理解は十分にあるが、指導に対する苦手意識や不安感が教材開発や指導法以前の問題としてあることが確認された。

4) 1)～3)のことを踏まえ、教諭が積極的にダンス指導に臨めるような研修会の充実がまずは必要であり、学習指導要領が目指す指導目的の正しい理解とそれらを具現化する教諭の指導力向上に確実に結びつけることが重要である。具体的には、目的別に対象を絞った研修の実施、多様な指導方法の習得を目指した研修会の定期的な実施が急務である。また、研修会以外にも、積極的な公開授業の実施、指導内容の意見交換、VTR資料の収集などが重要であると考えられる。

謝辞

本稿を作成するにあたり、資料収集にご尽力いただいた大阪市中学校体育連盟ダンス部理事岡崎茂美教諭ならびに宮本和子教諭に心から感謝致します。

文献

堀尾一夫(2008)ひと目でわかる2色刷り 中学校学習指導要領新旧比較対照表. 教育出版株式会社：東京.

片岡康子,村田芳子(2009), 第44回全国女子体育研究大会大会号：61.

松本富子,高橋和子,茅野理子,細川江利子,佐分利育代,廣兼志保,畑野裕子(1994), 現教職員のダンス指導実践に影響を及ぼす要因の検討ー大学履修経験が与える影響についてー.

舞踊学,Vol.16,12-24.

文部科学省(2010) 学校体育の充実.

http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/jyujitsu/1221013.htm

文部科学省(2009), 中学校学習指導要領解説.

東山書房：東京.

中村恭子(2009), 中学校ダンスの男女必修化の課題ー中学校教員を対象とした調査にもとづいてー. 順天堂大学スポーツ健康科学研究,1(1)(通巻13号)：27-39.

寺山由美,高橋和子,細川江利子,村田芳子(2010), 中学校・高等学校におけるダンスの実施状況ー各県のリーダー教員を対象にー. 舞踊教育学研究(第12号)：60-61.